

シンポジウムの前半で各パネリストに発表を頂いた内容を元に、ディスカッションを展開した内容を掲載する。

藤本聰 (柔道 パラリンピック金メダリスト)

橋本和典 (日本身体障害者アーチェリー連盟 副理事長)

八木三郎 (天理大学おやさと研究所 講師)

中西彩 (アーチェリー パラリンピック出場、天理大学職員)

難波 (司会) : これまでお話いただいた3名に、アーチェリーでパラリンピックに出場されている天理大学職員の中西彩さんを加えてディスカッションを行っていきます。

みなさんにそれぞれの立場から、現状として貴重なお話を頂きました。皆さんが活動されている場において障害者スポーツの環境が整っていないということでした。それに加えて実際に現状としてどうしていきたいかというようなお話もいただきましたが、スポーツをする環境についてももう少しお話ししていただきたいと思います。

藤本 : 僕は与えられるのを待っているのではなくて、できないのであれば自分たちからお願いしたりするとか、自分で自分の道は切り開いていく。あれがない、これがない、国がしてくれない、というのを訴えたり嘆いたりするのではなく、そういうのを待っていても何年先になるのかわからないから、自分から動いてどんどん動いていろんな人を巻き込んで協力していつてもらうようにしている。

橋本 : 今の藤本さんと同じような意見になりますが、障害者スポーツをこれからどんどん発展させていく上で、例えば施設がない、指導者がいない、だからできない、というのではなくて、先ほどちらっと言ったように、どこでも、誰でも、いつでもできる。工夫と知恵さえあれば、ちょっとしたイロハがあればできる、例えば、この部屋でも机を片付ければかなり広いスペースを作ることができる。そういった環境を見つけていく。こういった考え方でこれからさまざまな施設でやっていきたいと思っています。

八木 : 私は今、直接スポーツに関わっていませんが、関わっている中でお話しします。ダスキンという会社は国連が定めた国際障害者年である1981年に、全国にたくさんあるミスタードーナツの1月26日のお店の売上金の半分を寄付して、広く社会に貢献できる財団をつくらうということで「広げよう愛の輪運動基金」というのを作りました。

今後は障害のない人がリードしていくのではなくて、障害のある当事者の人たちに大いに勉強してもらってリーダーになり、今後の日本の障害者福祉をリードしてもらおうという目的を持って、1年間アメリカの大学へ留学させるという事業を始めました。それが今、30期、30年続いています。私の担当する人が、時折ですが、スポーツを勉強したいということで、世界各地へ行っています。去年担当した留学生は北京オリンピックにも出場したカヌーの選手で、オーストラリアへ行きました。留学生を担当しているいろんな国の障害者スポーツのあり方について聞かせてもらいました。それを日本と比較すると、明らかに障害者スポーツの捉え方に違いがある。それは何かというとはやはり障害のある人は普通ではなく、身体的な能力にものさ

しを当てて、人間を評価することが日本の社会は大変強いのだと感じ取れました。身体的な能力ばかりに目がいつている日本人に対して、明らかに諸外国はグッドマン博士が提唱した、「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に活かせ。」あの言葉そのものです。ですから、医学モデルで障害のある人を捉えるのではなくて、いわゆる一人の人としてとらえる、人としてというのは何が入るのかという日常生活が入るのです。学校へ行ったり会社へ行ったり、いろんな事がそのポジションにある。その中で生活をエンジョイする、エンジョイするためにスポーツがある。スポーツというのはすることばかりではなく、見る楽しみもある。

日本の社会では表面的には問題はないのですが、まだまださまざまなバリアがある。スイミングスクールへ通いたいと障害のある人が言うと門前払いを食わされるというような事例がいっぱいある。スポーツというのは感動なのです。もう、理屈抜きで、「ワー勝った！」そういうふうなことがスポーツの魅力であると思う。こういうふうな人生をエンジョイすることが非常に重要なことなのでこのスポーツの分野が社会との架け橋となり、未来を創る。日本の社会の中でまだまだバリアがある。スポーツを通して新たなクリエイティブな社会を創るというのが役割だと思います。

中西 : 私も競技者としてアーチェリーをしていて海外に行く機会があって、その中で感じるの藤本さんと同じようなこともあるのですが、周りから、こういう障害を持った人がいるから、ということで助けてもらうのではなくて、障害を持っている人自身が訴えていくことが、一番感じるものがたくさんあるのではないかと思います。そういう点でも自分は障害があるからと引きこもるのではなく、やはりみんなに知ってもらおうという意味で障害がある人がそういう意識を持って行かないと何も変わらないのではないかと思います。

難波 : 皆さんからご意見を頂きましたが、総括の時間となりましたので4名の方のお話と、基調講演の内容を合わせて、まとめさせていただきます。

まず、自分が動くこと。障害を持っている人、持っていない人、それぞれが自ら動くことで社会に訴えかけていくことが出来る。スポーツというものを通して社会に出て行くことによって人生の楽しみや、生きがいを見つけ出す。自分自身が楽しむことが出来れば、スポーツが、まだまだバリアの残る日本の社会と障害を持つ人の架け橋となり、未来を創っていくことができるのではないのでしょうか。

時間の都合上、総括に移ります。なお、藤本氏がパラリンピック大会で獲得されたメダルをお持ち頂き、展示させていただいています。メダルの方には点字言葉が刻まれており、メダルに直接触れ、見ることで感じることもあるかと思いますが是非、手にとって見てください。(続く)

